

■徳川宗春 尾張徳川家第7代当主。規制緩和政策をとり、質素倹約策の8代将軍徳川吉宗に逆らうものと、隠居謹慎に。

とくがわむねはる

荻原勘定奉行1696＝ 名古屋で、尾張藩第3代藩主徳川綱誠の二十男に生まれ、萬五郎と名付けられる。母は側室梅津(宣揚院)。

吉保大老格・1698＝ 2歳：祖母の千代姫(3代将軍家光の長女)が死去、
・・・1699＝ 3歳：父の綱誠が死去、長兄吉通が第4代藩主となる。
・・・1700＝ 4歳：祖父で2代藩主の徳川光友も死去。

御三家筆頭の尾張徳川家の生まれながら、二十男の末子であったため、自由に育ち、お豊奉行朝日重章など下級武士とも交わり、学問や武芸にもいそいで、独特の素養を積んで育つ。

御蔭参流行・1705＝ 9歳：この年、徳川吉宗が第5代紀州藩主となる。

外ヶ坊拘束・1708＝12歳：兄吉通より偏諱を受け、諱を通春とする。
徳川綱吉没・1709＝13歳：久留米藩主有馬則維から養子にと申し出あるも、たち消えに。初めてお国入りした兄吉通と初対面。

冥途の飛脚・1711＝15歳：兄吉通に嫡男五郎太が誕生。兄吉通の側近が刺殺される事件。
乾山陶器店・1712＝16歳：兄通頭(のちの徳川継友)・通温は江戸に下向し、譜代衆となった後、
和漢三才図会1713＝17歳：4代藩主の兄吉通の命で、江戸へ下向、藩主の兄吉通が奥で夕餉を摂る際に共に食事をしたほど可愛がられる一方、間部詮房らの意向から、6代将軍家宣廟造営のため、芝増上寺の祖母千代の廟が壊され、尾張藩分家の梁川藩初代藩主が死去、江戸下向に同道してくれたお勝手番2人が吐血頓死・割腹自害、さらに兄吉通の正室の実刑が死去するなど陰謀が渦巻くなか、兄吉通が死去、その甥で跡を継いだ5代藩主五郎太も死去し、兄通頭が継友と改名して6代藩主となる。元服し、求馬通春と名乗るも、任官もなく、

絵島事件・・・1714＝18歳：
徳川吉宗将軍1716＝20歳：ようやく第7代将軍徳川家継に御目見し、譜代衆となり、松平の苗字も許されるもなお任官はなかったが、徳川吉宗が第8代将軍になるや主計頭に任官され、

隅田川の桜・1717＝21歳：従四位下に昇って、大名格となる。
御蔭参流行・1718＝22歳：痲瘡に罹るが、まもなく回復。吉宗の将軍継承に不満だった兄通温が名古屋城下に塾居謹慎となる一方、
小石川薬園・1721＝25歳：この年を皮切りに、将軍吉宗から特別に鷹狩の獲物を数度賜り、紅葉山東照宮の予参を命じられるなど、御家門衆として大切にされるも、身分が不確定のままていたが、

火の見櫓制・1723＝27歳：
近松没・・・1724＝28歳：正室を迎えられず、この年、側室との間に長女が誕生。
・・・1725＝29歳：この年の大火で、江戸の尾張藩の屋敷が全焼、藩財政が圧迫される。
懐徳堂公認・1726＝30歳：次女、三女が誕生。

徂徠没・・・1728＝32歳：四女が誕生。実母の宣揚院を見舞うため15年ぶりに名古屋へ下向。
梅岩心学始・1729＝33歳：梁川藩第3代松平義真が死去してが断絶すると、吉宗の計らいで梁川藩3万石を改めて与えられ、大久保松平家を再興。この年藩は飢饉に見舞われるが、神社奉納米を放出させて、一人の餓死者も出さず、ほかにも様々な庶民政策、全くお国入りせずに、生涯領民から慕われる。このまま部屋住みで終わるところ、
・・・1730＝34歳：日光社参。大病に罹った*兄の6代尾張藩主徳川継友が死去、実子が夭折し養子も無かったことから、将軍吉宗の計らいで家督を相続、御三家筆頭の尾張徳川家第7代当主徳川通春となる。

・・・1731＝35歳：*将軍吉宗より偏諱を授かり、徳川宗春となる。政治宣言の著述「温知政要」を著して、名古屋に戻ると、4代藩主吉通正室の実家の九条家に3千両を寄付し、朝廷との関係を大切にするとともに、公儀の法度・代々の法規を守るべきことを前提に、庶民が自由に活動できるようにし、享保の改革を推進する将軍徳川吉宗のもとで老中松平乗昌が主導する幕府の質素倹約規制強化とは全く逆行、

享保大飢饉・1732＝36歳：この年には40人いた兄弟姉妹全てが死去している。「温知政要」を藩士に配布し、倹約や規制を否定する「條々二十一箇條」を發布。再建なった江戸屋敷市谷邸も江戸町民に開放し、吉宗から使者を介して詰問されるも、一歩も引かず反論したと言われる。継友時代の倹約令で停滞していた名古屋の町は活気を得て、その繁栄ぶりは「名古屋の繁華に京(興)がさめた」とまで言われた。また治世の間、尾張藩では一人の死刑も行わないなど、斬新でリベラルな特異な政策をいくつも行なうが、幕府により「温知政要」が出版差止めとなり、尾張藩の財政も赤字に転じたようで、2度目のお国入りした際、

・・・1733＝37歳：尾張瀬戸水野山から木曾の山々に至るまでの2万人規模の巻き狩りを計画するが、家臣の反対で中止し、
昆陽蕃蕃考・1735＝39歳：それまでに娘が次々夭折していったところに、嫡男国まで丸が死去。吉宗より拝領した朝鮮人参の栽培を始めると、

悪鋳再開・・・1736＝40歳：*3ヶ所の遊里を1ヶ所に集め、新規の芝居小屋も禁止するなど、政策転換したが、この間、幕府と朝廷が対立し始め、水戸藩から上程された「大日本史」の出版許可巡って、朝幕間は緊張関係に陥る。当時の幕府の緊縮規制強化の経済政策は失敗しており、代々朝廷と深いつながりを持つ尾張藩の規制緩和の経済政策の大成功が幕府の威信を揺るがすとみる幕閣と、尾張藩を持ち上げる朝廷との間で、板挟みとなり、幕閣と結託する藩重臣が、宗春の失脚を画策。

・・・1737＝41歳：嫡男となる次男が誕生するも、
・・・1738＝42歳：夭折してしまう。宗春が参勤交代で江戸に移った直後、竹腰正武らが尾張領内で実権を奪い、宗春の藩主時代の命令をすべて無効とし、宗春藩主就任前の状態に戻すとの宣言を発したため、尾張藩領が混乱、

外ヶ船出没始 1739＝43歳：*将軍吉宗自身は腰を上げずにいるも、老中松平乗昌から家老に隠居謹慎の内命が発せられ、将軍命は遠回りに伝えられて、名古屋城三の丸の屋敷に隠居謹慎させられる。宗勝が8代藩主となると、6代藩主継友の時代の法令が復活し、質素倹約が奨励され、名古屋城下の賑わいは火が消えたようになったといわれる。

・・・1741＝45歳：隠居謹慎後は、父母の墓参りも含め、外出は一切許されなかったが、6代藩主継友の実母の屋敷で、藩主宗勝からの貴重な品々の贈り物があり、将軍吉宗が使者を遣わし、気色伺いをしたという記録もある。

徳川吉宗隠居1745＝49歳：吉宗が隠居し、嫡男家重が将軍に就くと、宗春を謹慎に追い込んだ老中松平乗昌は罷免される。

・・・1750＝54歳：

徳川吉宗没・1751＝55歳：吉宗が死去。
宗春が隠居して15年が経った頃、小刀屋藤左衛門こと木全雅直が宗春の恩赦を願い出た。その後も、歴代の尾張藩家老成瀬家の当主なども幕府に宗春の恩赦を願い出ている、

山脇東洋解剖1754＝58歳：尾張藩歴代藩主の隠居所の御下屋敷へ移り、尾張徳川家菩提寺の建中寺への参拝、尾張藩の祈願所である八事山興正寺への参拝が許される。その後は、茶碗を焼いたり、絵を描いたり、光明真言や念仏を唱えたりして、悠々自適の生活を送ったという。

大武政治批判1759＝63歳：
大岡忠光没・1760＝64歳：9代将軍家重が死去し、10代将軍家治が就任。幕府の政策は田沼意次が主導し、重商主義政策へと転換。尾張藩では、家重と同年同月に、8代藩主宗勝が死去し、9代藩主宗睦が就くと、名古屋は宗春時代の賑わいを徐々に取り戻して行き、宗睦は、「尾張藩中興の祖」とまで呼ばれるようになる。隠居後も宗春は、将軍吉宗から拝領した朝鮮人参を下屋敷で大切に育てていたが、のち宗睦は宗春が育ててきた菓草園を用いて、名古屋の医学を大いに発展させている。

・・・1761＝65歳：隠居後初めて菩提寺建中寺に墓参りに出た際、尾張の町内の者たちは宗春のために提灯を並び立てた。最後まで、側室のいつみとおはるに寄り添われて、

加賀千代句集1764＝68歳：没した。